
鏡の世界

あにゃん

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の世界

【Nコード】

N9562H

【作者名】

あにゃん

【あらすじ】

主人公の考えたことや主人公の身に起きたできごとを淡々と綴っております。単調な進み具合ながら物語は思わぬ展開に…

変わってる

「変わってる。」という台詞が妙に頭に焼きついてはなれない。今日言われたんだよな。まったく、好きなものを好きって言って、嫌いなものを嫌いって言って何が悪い。あ、悪いとは言われてないか。変わってるって言われただけか。

にしてもこれは実に便利なコメントではないか。馴染みないものにはとりあえずそう言えばいい。自分は変わってるんだな。「普通だね。」って言われるのもあまり良い気持ちにならないけど、普通と変わってる、どこから区別されるんだか。大多数の意見が普通なのか。皆で間違ってたかどうか。太陽が回ってると言ってた時代を考えてみなよ。いつだって少数派はなかなか認めてもらえないんだから。

とにかく自分は自分の思うことを信じたい。かといって“出る杭”になるつもりはない。打たれるなんて厄介だもん。自分は目立ちたいと思ってるわけではない。そのバランス、難しい。

でもさほど真剣に悩むべき問題でもないで、今から全然違う話するけど最近顔にホクロができた。前はなかったのに口のすぐ右に一個。シミの成れの果てかい。どんなに鈍感な人でも顔の黒い点を見過ごすまい。見過ごす人は変わってる？いや、そんなことはどうでもいいから。このホクロは新たなチャームポイントにしようと思う。この話もおしまい。

こんな自分はこの世界で大衆の中の一員として生きている。極端な現実主義者ではないしそれほどロマンチストでもない。でも流石にファンタジーと人生が交わることは期待していない。それらは別々の存在として楽しめるものとして位置付けている。

だから次の日起きてびっくりした。チャームポイントが移動しているではないか。そこまで観察してるのかと問うまえに、最後まで

話を聞いてほしい。右にあったホクロが今は左にある。ちょっと鈍感な人なら気づかないかもしれないけど、チャームポイント認定をした者としてはなかなか衝撃的な出来事だ。しかし、だからどうしたというのか。鏡の国に迷い込んだのか。洗面台の鏡の向こうにいる方が本当の自分？我ながら想像力豊かだと感心しながらも、本当の自分だろうがホクロが移動した鏡の自分だろうが、一生懸命生きていけばいいと思うところまでにとどまった。細かいことは気にすまい。ホクロ移動事件、解決。もしかしたら初めから左だったのかもしれないという追求はあえてしないでおく。なんでって、めんどくさいから。何せ、これから予定がまっているので、そのことで頭はいい。

コーヒー（１）

滅多に飲まないコーヒーを注文してみた。でも残念ながらブラックでは飲めないんだ。ミルクと砂糖は一つずつ。ブラックで飲めたらちよつとかつこいいのに。ただし一つ言わせていただくと自分はココアが好きだ。

昨日は忙しい日になるかと思ってたのに、単刀直入に言うと、実に暇だった。ついでにいうと今日も暇を持て余している。

最近読書にはまってる。嘘。本当はさっきぶらりと入った本屋で目についたベストセラーらしき本を買っただけ。本屋で衝動買い。ちゃんとカバーをつけてもらった本を開いて知的人間を気取る。読めない。頭で昨日のことを回想してしまふ。脳というものはけつこう一つのこと集中してしまいがちだ。目は活字などおっていない。読まない。本は開いたまま。

昨日の予定は確かこうだった。朝DVDを返却しに行つて友人の家にしばしお邪魔し、１５時から髪を切りに行き、再び友人と合流しそのままコンサート会場に直行。

しかし、実際はこうだった。朝DVDを返しに行くまでは予定通り。あとはずっと自分の家にいた。

友人にこう言われたんだ。

「なんで約束通りに来るわけ？」

わけがわからない。

「普通来るでしょ。」

「なんで普通に生きるわけ？」

もつとわけがわからない。腹が立つというより混乱したので黙つてると、最後のとどめは

「そんなに普通に生きてちゃ友達いないでしょ。」

パソコンとしてるうちに、気付けば自宅待機。あんなやつだったっ

け？あんなやつだった気もする。いやいや、違う違う。自分に対して「変わってる。」との評価を下したのは紛れもなくあいつではないか。矛盾というやつか。反抗期か。お年頃っていつまでか分からないけど、そういうことにしよう。そうだね、お年頃は難しい。なんて、そんな簡単に済ませていい話なのかこれは。

思ったより早く時間が過ぎたようで髪は諦めなければならなかった。コンサートはどうするんだ。もういいや。

なんなんだ、このぐだぐだな感じは。我ながら喝を入れたくなる。しつかりしろはちべえ。自分はちべえではないけど。

普通に生きてると友達がいないってどういうこと？普通じゃない方が孤立することもあるこの世の中でこの期に及んで何を言うか。おっと、ほかのことにも気づいたんだけど、もしかして自分は友人と呼んでいるのにあいつは自分をそう呼んでくれないのか。対等関係じゃないのか。そいつは問題だ。なんて考えてたら夜が明けた。途中寝たけど。

コーヒー(2)

ざっと回想終了かなと回想とは全く無関係の本を閉じてコーヒーを一口。うーむ。コーヒーちよつと熱かった。

ホクロに始まり、友達いないに終わった一日。昨日の考え事の間はホクロの存在は忘れていたけど、今朝また鏡にうつる口の左側のホクロをしかとこの目で見た。昨日奇妙な一日を総合して考えてみる。ホクロと友達、普通……結び付くはずがない。そこにリンクはいらない。ホームページじゃないんだから。

楽天家ではないが神経質でもないので、大したことない話を深刻に考えてみようとは思わない。昨日の出来事なんていつの間にか頭から消え去るだろう。きつと重要じゃない問題だから。

ところがここで終わらないから世の中憎いというか、面白いというか。今度こそ、ちまたで話題となつてゐるこの書物虜に自分もなつてしまおうと意気込んでみた矢先、目の前に例の友人が現れた。本当に人生って飽きない。コーヒーを片手に愛想良く挨拶しながら寄つてきた。面白い面白い、同じものを注文したか。あれ、ブラックコーヒーだよ。何故かブラックが優位というイメージがあり敗北感を覚えた自分をよそに、友人は苦笑いしながら言った。

「砂糖もミルクも入れたら飲めない。恥ずかしいけど。」

よし、きた。予想を裏切ることなく、昨日のままでわけがわからないう。いや、むしろ嫌味として言っているのか。だとしたらなかなかタチが悪いけど、そんなやつだっけ？挨拶に軽く返事をして観察していると本当に恥ずかしそうに飲んでいた。熱いのに早く飲みほしてしまいたいようだった。恥ずかしいならそんなの頼まなきゃいいのにと呑気に突っ込むより、もっと気になるのはブラックコーヒーって恥ずかしいのかという点。今までの自分の常識が覆された気分だ。今自分が全く知らないうちに甘党ブームでもきているのか。それでも恥ずかしいことはないだろう。自分はブラックコーヒーにかっこ

いいイメージはあってもそれを飲めないことを恥じたことはない。
嗜好は人それぞれだ。極端でない限り人目を気にすることはないだ
ろう。

目の前に座っているこの人、さらに興味深いというか奇妙な言葉
を続ける。

「ブラックコーヒー飲む人って大人って感じでしょ。だから人より
優位な感じがして嫌なんだよね。かっこいいって思ったでしょ？そ
ういうの恥ずかしいな本当。」

ついに自分の頭はパニックに陥ってしまった。助けてください。理
性。

コーヒー(3)

とうとうたまらなくなり、口を開いた。と同時に自分が今までずっと黙ったままなのに気付いた。いかんいかん。こういう場面に直面した場合の対処法は自分の頭の中のマニュアルには載っていないけど、そういうときは恐らくこう言えばいいのだ。

「変わってる。」

実際に自分で使ってみるとやっぱりこれは便利な言葉だと分かる。だが、すぐさま自分は明らかに初期微動で動揺しすぎたことに気付くことになった。

なんと、相手は度肝を抜かれたような顔して「そんな当たり前のことと言っなんて、本当に普通だな。」なんて言ってきたではないか。

ここはあくまで平和主義。自分は穏和にいこう。

「普通で面白くない？ここボケるとこ？そうかいや、こりや失礼！」

「普通で面白いよ。普通でいるなんて面白い。なかなかそういう人いないから珍しい。」

自分はこの台詞を耳にした直後、「きょんとした」という表現がまさに当てはまる表情をしていたにちがいない。君、もう何も言わなくていいから速やかにこの場から立ち去ってくれないかな。頭の整理が必要。

ありがたいことに友人は素早くコーヒーを飲みほすとさっさと帰っていった。なんだか風のようなやつだ。友人の登場の後は呆気にとられていたせいで自分のはすっかりアイスコーヒーになっていた。まったくもう。

物事を分析したいときにはより多くの情報があるに越したことはない。「冷めても美味しい。」と自分に暗示したコーヒーを一気に飲んだらすぐに、近所に住む同じ年のいところに会いに行った。もと

もと暇だったのといとお勧めのDVDでも観ようと訪問することは朝から決めていたのだけだ。

確かそうだった。この人もコーヒー好きなんだ。しかも皮肉にもブラックコーヒー。自分は今飲んできたからお茶でいいと言ったのに、コーヒー出してきたよ。そっちの方が手間はかからないから文句は言わないけど、砂糖と牛乳の注文は抜け目なく行っ。

「いつもブラック飲んでるよね。」

と今まで気にとめなかった部分に今日はあえて突っ込んでみた。

「仕方ないだろ。甘いのが苦手なんだから。」

今日は不機嫌なのかな。自分の台詞が気に障ったのか、ちよつと怒ったようなふてくされたような感じだった。ブラックコーヒーはそこまでタブーだったのか。知らなかった。

雨が降りだした。自分は雨が好きだ。晴れより曇りより雪より、断然空から落ちる水の滴が好きだ。好きなものに関することに対して人間は凝るもので、おかげで自分は傘を十本も持っている。多いよね。しかし今日はあいにくマイアンブレラは連れ添ってきていない。

「帰るとき降っていたら傘貸すよ」と申し出てくれたが

「大丈夫。濡れて帰るのが好きだから。」とにこにこして返事してしまった。あちゃー。一言余計だった。本当に好きだけど、言う必要はなかっただろう。相手の次の言葉は恐らく「変わってる。」で決まりだな。

ところが、

「あつそう。」

あれ違ったよ。あつさりだな。普通もうちよつと突っ込むべき部分だと思っただけだ。

コピー（４）

さて、結局雨は止んだので濡れずに帰宅した自分は、自分で意外だと思ふ、まさかの結論を導いてしまった。これが帰納法というやつか。でも数学はちよつと苦手だ。

簡単に言つと、どうやら自分は鏡の世界にいるらしい。鏡の中つてのは現実と左右が逆だけど、今自分は実際に文字とか時計とかに違和感を感じない。現実で右にあったものが鏡では左にあつてもそれは右と呼ぶことには変わりない。太陽が西の方から昇るうがテストには東から昇ると書かなくては誤り。世界全てが反対になれば、何も変化がないように見える。そういうことだと思ふ。だから見える部分では鏡の世界だという実感はない。ホクロに気付いたのは、前に現実で鏡を通して見ていたからなのか。うーん、これだけが唯一いまいちしっくりこない。

表面上では現実と変わらないように感じる世界だけど、どうしたものか、鏡の中では現実と概念が逆転しているのではなかるうか。人間の中身が大きく異なっているということだ。鏡の中つてそういう世界だったのか。

自分は説明が苦手だけど、どういうことか、もう少し分かりやすく示すように努力してみる。じゃないと自分が気違い染みたことを言っているように見えてしまうから。

データ不足かもしれないが、限られた事実を照合してみる。普通に生きるのは珍しい。かつこいいことをするのは心底恥ずかしい。友人といとこからそういう印象を受けた。つまり、ここでは皆変わった言動行動をとり、普通なものほど希少価値がある。普通概念が通用しないなんて、なんと生きづらい。ただ人目を気にせず、変わったことができるのはいいな。平凡であればあるほど面白いけど孤立するみたいだ。普通だと友達ができないのか。それなら自分もあまり無難なことをしないように気をつけないといけないな。恐ら

くここでは現実で栄誉あることをしたら見下されてしまうようだ。
劣等感が優越感に変わる場所ということか。現実でコンプレックス
に悩める人に逃え向きだな。今度は誰か誘ってこようと。

今からこの“鏡の世界”理論を確かめてみなくては。そろそろば
れているかもしれないが、自分は至って暇な人間だ。

音楽（1）

それから二週間経ったがホクロは左のままだから、今のところはまだ鏡の中。確かめようという決意をするまではよかったけど、なんだかんだで自分は大きくして行動派ではなく特にこれといって何もしてない。ある程度自分の中に結論が出たから証明する前に満足してしまった。

普通が通じないって困ると思っていたけど、案外そうでもないかも。現実と行動は一緒なんだ。ただ感じ方が正反対なだけ。はじめは混乱したけど、だんだん慣れてきた。この時点で自分は完全に鏡の世界の存在を認めているような感じだ。だからもう証明はいいや。生きていく上で支障はない。確かにこれが事実なら怪奇現象なのかもしれないけど、例えそうだとしても自分はそこにのめりこんでいきたがるタイプじゃない。流れに身を任せるのが一番。

自分はやはり変わった人間なのかってずっと考えてる。だから鏡の世界で馴染めてしまうのか。だとしたらあまりこちらにどっぷり浸かってしまうと現実へ戻ったときに苦労しちゃうかもなー。ところでさ、ある日突然また現実に戻ることはあるのかいはちべえよ？ だからちべえって誰なんだ一体。ともかくだ、仮に明日朝起きてホクロが右にあったときにはちゃんと頭を切り替えないといけない柔軟にいかう。 “ 郷に入っては、郷に従え ” 精神根強く。わかったかいはちべえ。

ほどよくポジティブ思考でおおらかに人生を送るうえで、娯楽は欠かせない。映画でも音楽でも趣味でも幅広く手をつけてみる。自分は音楽の中でレゲエが好きだ。この前行く予定で結局行かなかったコンサートはJ・POPだし、ロックも聴く。どうも自分の周りにレゲエ好きがいらないものだから、ひとつのものに偏らないように聴くことにしている。執着しない。なにごとにも加減を利かせる

わけですよ。よ、生き上手！

基本的に悩みは抱えたくない。自分の悩みなんて、個々で生きる社会では、取るに足らない問題でしかない。皆他者に対してそこまで真剣にはならない。自分はウジウジしてる人のことを冷たく批判するつもりはないけど中にはそうする人もいる。悩んでるのに可哀想に。なんて考えたら悩むことは悪循環をうむような気がして馬鹿馬鹿しく思えてくる。無駄なことはしない。人生は悩んだってどうにもならない問題だらけなんだから、無駄なことはしない。よ、合理主義！

どんなことがあろうとも、要領よく生きていく。順調に生きていっつかちゃんと幸せになってみせる。人生設計ばっちり！

音楽(2)

たまに駅前にかっこいいストリートミュージシャンがいて、たくさんの方が聞き入ってるよね。自分もレゲエよりなにより、まず音楽を愛する人間として、上手な演奏には惹き付けられる。

残念ながら鏡の世界では、上手な歌手ほど腰が低い。恥ずかしいならなんで人前で歌うんだろう、と思うけど、人の勝手だもんな。好きななら恥をしのんでも歌う、か。ここはできればできるほど苦労が多い世界だな。

アコースティックギターで弾き語りをしているニット帽のミュージシャンは歌い終わるなり深々と礼をして

「失礼いたしました。」などと言ってそそくさとギターをしまい帰り支度を始めた。

なかなか上手だったものだからつい立ち止まって聞いていた身としては、その姿は何とも憐れに見えた。変なことをしても変な目で見られないので、自分は馴れ馴れしく話しかけてみた。たまに変わったことをやらかさないと逆に白々しい目で見られることも知っていたしね。

「今のオリジナル?」

初対面なのに敬語じゃないのはちょっと抵抗があった。もちろん礼儀はわきまえないといけないという意識はあるけど、今日は“礼儀を無視する”という変な行動までやらかしてみた。これはレベルが高い。

「お恥ずかしながら自分で作詞作曲を手掛けました。とても好評なのでもうすぐCDにもなるんです。すみません。」

吹き出しそうになるではないか。腰が低すぎる。自慢のはずなのに、眉を下げて申し訳なさそうにされたら、どうしても謝罪にしか聞けない。鏡の世界ミラクル。

自分はかなり音痴だ。そのことを告げると

「羨ましい。なんで自分には歌の才能がこんなにあるんだろう。」
現実の感覚で深読みすると、むっとするこの言葉は、鏡の世界の感覚で最高の誉め言葉として受け入れる。

「ありがとうございます。」などとは言わない。誉め言葉に普通に感謝してどうする。自分は無言でその場から立ち去った。完璧。最初から最後まで変なやつ。

コツはつかんできたけどやっぱり難しい。変わってる方が良いなんて、難しい。普通って何かを考えなくちゃいけない。
後方で声がする。

「良かったらライブ見に来てください。」
振り返った自分にそのミュージシャンはご丁寧にチケットを渡してくれた。おぬしもなかなかのわる…じゃなくて、なかなかの変人よの！。

何が起きるか分からないという意味でとても刺激的な毎日だ。けっこう癖になるんだなこれが。

音楽(3)

貰ったチケットは2枚あった。一人じゃ来づらいという配慮だろう。音痴な宣言をするなり黙って立ち去ろうとした自分に対してよくまあここまで親切にしてくれたものだ。さすが鏡の世界。心遣いが違う。本当に違う。

友人を誘う。たまには普通に誘う。普通のことをするのは頻繁じゃないければ物珍しくて新鮮なのだ。普通に待ち合わせをし、ライブハウスに時間通りに向かった。今日は自分が鏡の世界に来て以来、記念すべき普通の日になるかもしれない。

例のニット帽のミュージシャンは実はバンドを組んでいた。ギターボーカルとしてモチベーションを保つために、ライブの練習の意味もこめて、よく一人で駅前で歌っているのだ。仲間がいつも一緒にいないのは、上手な演奏を披露するのを躊躇しているためだろう。はいはい。

ライブハウスのような場所の演奏はたまに歌詞が聞き取れないほど無駄に楽器の音が強いこともあるけど、このバンドはメッセーj性の高い、バラードのような落ち着いた曲がメインだった。本当に鳥肌が立つくらい完成度の高い演奏だった。

自分には音楽を支配する力はない。だいたい音楽に支配されるか、波長を合わせるだけ。音痴だし、音感もなく不器用なのでギターを挫折した経験がある。だから目の前の音楽の支配者たちに少し嫉妬する。以前の自分ならね。今は才能なんて要らない気がする。

この様子を目の当たりにしたら誰だってそう感じるだろう。素晴らしい演奏の間も観客はぼんやり眺めてるだけ、終わった後感想を漏らす者さえいない。なんで鳥肌が立つのかいぶかしがるような雰囲気の人ばかりは見かけたけど、楽しんでいる印象は全く見受けられない。当の演奏者側はというと、MCが謝罪ばかり。「おかけ

になつて構いません。」「なんて言つてるし挙げ句の果てには「どうぞお帰りになつてください。」「と懇願する始末。一応自分は招待されたはず。帰つてもいいんだろうけど良い音楽は聴いていたい。

実に奇妙な空間だった。楽しかったとはお世辞にも言えない。皆は何のために来ているのだらう。このバンドは何のためにライブをしているのだらう。

楽しめないとこに行く。これは変わった行動。恥ずかしいことをする。これも変わった行動。だから鏡の世界ではこういう謎がありふれている。自分もいちいち疑問に思うのはそろそろやめようかと思ひ始めた。無意味な探求心など自分には要らない。

音楽（4）

後日、ニット帽のミュージシャンと再び駅で遭遇した。自分が現れた頃には弾き語りを終えていて帰ろうと歩き出したところだった。もう少し早く来れば聴けたのに、コンビ二で長く立ち読みしすぎた。惜しかった。実に惜しかった。まあいい。

また歌の実力があがったのか、肩を落として歩いていたミュージシャンは、自分に気付くとにこりと微笑んできた。普通のリアクションだなー。

二人はどちらからというわけでもなくベンチに腰掛けた。聴けなかったことが残念だ。と自分が告げるとミュージシャンはおもむろにアコースティックギターを取り出した。新しい曲だと言って前奏を弾き始めた。良い音だな。

才能なんて要らない

才能なんて要らない

はずれくじをひいてしまったら

お荷物を抱えて

生きていかなくちやいけない

何ももたなくていい

何にももたなくていい

別に望んだわけでもないから

いきなりもたされても

途方にくれるばかり

上手にできればできるほど

両手が塞がっていく気がする

何にもできない、何ももたない

そんな人はいつも手ぶらで
その手でたくさんの自由をつかむ

この世界はおかしい
でも仕方がないこと
受け入れなければならないこと
これが世界の道理

希望も自由もつかめない
明日は笑えるか分からない
不安や苦しさが胸を締め付ける
だから少し息がしづらい
いつそもたされたこれらのものを
無視して捨ててしまおうか
そうしようと決めたその手は
まだ離せない
しっかり掴んだまま

一緒に笑えたらいいのに
才能なんて要らない
何ももたなくていい
こんなもの要らない要らない

もつと他に欲しいものがあるから

そのメロディはあまりに悲しくてあまりに美しかった。でも自分は後奏に入っただのに気付くとすぐにその場から立ち去った。なんてズルい歌を歌うんだろ。まったくもって贅沢な悩みを抱えている。

もう相手してらんない。勝手にしろ。

頭からその曲は離れない。たった一度聴いただけなのに、離れない。そんな曲をうめるのがあのミュージシャンの才能なんだろう。本当にすごい人間だな。でも全く羨ましくない。自分は自分のままでいい。才能なんて要らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9562h/>

鏡の世界

2010年11月5日01時58分発行